ち、「いったいわれわれはどうして思い出すのか」ということが、忘却の問題と絡んで大きな問いとなってくる。

ところで、グノーシスとの論争「悪はどこから unde malum」に関して、アウグスティヌスは「われわれが悪を犯すのはどこからくるのか」というように問題を置き換えた、と、このようにリクールは解釈する。リクールは「美」を「真」に置き換えたが、記憶論の場合は歴史の真実性と記憶の忠実性ということを問題にしているので、記憶と美についての言及は特にない。リクール自身は芸術に造詣が深い人だが、ここでは記憶と美について直接語られてはいない。

さらに、集合的な忘却ということについてであるが、フランスでは大二次世界大戦後、レジスタンスの闘士がもてはやされ、それで戦時中の記憶が忘れ去られた、いうことができる。戦時中のヴィシー政府によって何が行われたか(特にユダヤ人の問題)、あるいはアルジェリア戦争の問題がある。こういった事柄について一九七〇年代、フランスでは「記憶の義務」ということが言われるようになった。人為的に記録を抹消するといったことは自然ではなく「人為的な忘却」である。シラク大統領はアルジェリア戦争の責任に関して謝罪した。意図的な忘却を再び想起しようという流れがあるのである。記憶の義務の法律化も問題になっている。

柴田　有

若い方からのご発言を。

田内　千里

この著作の中で「身体の位置づけ」ということに非常に興味をもった。特に『告白録』第七巻から第八巻に関する心身論的表現についてである。とりわけ興味深かったのは「身体のほうから始めに神の言葉に陥落してゆく」ということである。最終的に残るのは「こころ」である。なぜ身体のほうが先なのか、ということに関してうかがいたい。

加藤　信朗

これは考えなければならない、素晴らしいご質問だと思う。われわれの経験では頭はちっとも動いていないけれど身体がどうにもならない、というのはよくあることだが、よく考えてみたいと思う。

佐藤真基子

御著書を読んで考えてみたいと思ったのは「主よ Domine」という呼びかけについてである。まさに『告白録』冒頭のこの言葉が全体を貫いているという先生のお考えが印象に残った。呼びかける invocare ということは、「主よ」という仕方ではなかったにせよ、それ以前からあったのではないかと思われる。キケロを読んだときから神に向かって強い欲求が沸き起こったと言われているが、それでは「主よ」という呼びかけと、それ以前にもあった「神を求める」ということとの違いは何か。光を見たという体験を描くために『告白録』が書かれたのだとすると、光を見たという体験によって「主よ」という呼びかけが親しいものになったということと、それ以前にも求める仕方があった、求めるべきものを記憶している、ということも含めて、それが『告白録』にも書かれているということをどのように考えたらいいのだろうか。

加藤　信朗

たしかに、『告白録』には、「etiam」すなわちマニ教に心酔していた時代「でさえも」、自分は真理 veritas に向かって喘いでいた、という表現がある。そこで非常に重要なのは、「medullae animi mei」私の魂の最も奥では真理を喘ぎ求めていた、ということであろう。当時のアウグスティヌスにとっては聖書に書かれていることを veritas であるとは絶対に認められなかった（あんなものは「子どもの遊び」にすぎないとも言っている）はずである。聖書で言われていることこそが veritas であると認めるところからは、ずいぶん遠いところにある、そういった時でも veritas という言葉が契機となっている。その点では、加藤武先生が仰るようにキケロ体験が原点となっているということには同意できる。しかし同時にそれがマニ教に引き入れられるきっかけにもなったという意味では、やはり事実上はファウストゥスとの出会いが転回点であると言えるのではないだろうか。

先ほど田内さんが仰ったこととも関わるが、anima や animus といったものは自己意識を持った部分だということができるが、そういった anima 自身は自分ではないと思っているような部分がどんどん自分自身を治めていってしまう、ということがある。それと同じようなことがこの medullae animae mei についても言えるのではないだ

ろうか。すなわちそこでも、veritas という言葉はそれとして働いていたということである。
　これは身体と精神の重層性として、『告白録』においても、まだまだ広がりのある問題だと言うことができる。

水落　健治

　私は、「species が神を語る」という問題について考えた。species というと、アウグスティヌスにおいては memoria の外にある外的な事物が持っている species である。その意味では身体的なもの corporalis も含まれている。そうすると、corpus とは、身体的な自分を除いた外のものというだけではなくて自分の身体も含まれるわけで、ここで田内さんのご質問とも繋がってくるものがあるような気がする。外のものが神について叫ぶというとき、むしろ自分の身体よりも精神のほうが遅れて引っぱられる、というようなことがあるのではないだろうか。

加藤　信朗

　加藤武先生が仰った、「amor が私の重さである」といわれるときの amor の問題の重層性については、まだまだ研究されなければならない、と感じる。これは殊に日本人が研究したなら、ヨーロッパ人が研究していること以上のものができる可能性があるではないだろうか。

加藤　武

　加藤信朗先生が res という語をとても美しい日本語で様々に置き換えられたのは印象的であったが、先生の書物では、オスティアがあまり語られていないのでは、と感じる。res が自ら語り出す、それがオスティアの経験ではないだろうか。むしろ『告白録』の中心は、（暴論を言えば）回心ではなくてオスティアではないだろうか、と。

加藤　信朗

　これは、おそらく加藤武先生からの、最も根本的なご質問であろう。このことは私にも予期されていた問いであって、もっと正面からお答えしなければならないことでもあると思っている。たしかに私は、オスティアについて「たくさん」書いてはいないが、しかしだからといって、重要ではないということでは決してないのである。私は万感の思いを込めて、数行で書いているつもりである。res につ

いて問題として主題化して分析しようとすると、じゅうぶんに長くなるはずだが、これは必ずしも主題としては出てこないことである（私は「分析」せずに書いている）から、それをしてオスティアのことを「軽く」考えている、ということではない。これについて主題化したらどうなるか、ということは、私にとっては次の課題ということになる。加藤武先生とは、すでに五十年ほどのおつきあいになるはずだが、おそらくこの点で、これからさらにまた五十年はかかるか……、とさえ思われる問題ではある。

signum と res という語について少し調べてみたが、英語で考えると、signum にはすぐに sign という語を当てることができるが、res は驚くべきことに、英語では「何もかも」が res ということになってしまう。つまり英語では、ラテン語の res にあたるひとつの語はない、ということである。その点、日本語で「こと」とは（「これはことだ」とか「ことが起こった」とか言えるように）、非常に力強い言葉だ、と感じている。

ところで、私の著書に対して、最初に内容的なご質問をくださった方が本日おいでになっている。ホメロスの用語法から「praecordia」という語についてのご質問であった。これはすごい問いである。私は書かなかったけれども、プラトンの用語法を調べてみて驚いたことがある。プラトンの「praecordia」にあたる用語法は、全て古典からの引用であって、プラトン自身の言葉ではなかったのだ。すなわちホメロスあるいは悲劇からの引用なのである。私はこのことに非常に驚いた。

わざわざ金沢からおいでの安村先生から一言いただきたい。

安村　典子

私は西洋古典学で、ギリシア文学（『イリアス』、『オデュッセイア』、ギリシア悲劇など）を専門としているが、今日は、荒井先生の「人称代名詞」に関するお話が私自身のやっていることとも関連しており、興味深くうかがった。神を人称代名詞化するとはどういうことなのであろうか。日本語で「あなた」と直接言うときは、基本的には目下か同等の者に対して以外にはありえない。「あなた」と言うときにはそのような距離がある。ところがアウグスティヌスは神にむかって「あなた tu」と呼びかける、これはどういうことか、ということを今後考えてみたいと思った。

また、先ほどの「精神と肉体」ということに関して私の専門分野から少し申し上げたい。ギリシアには古くから「変身物語」というジャンルがある。ご存じのようにギリシア人は、神と人間とを「死なないもの」か「死すべきもの」かという観点ではっきりと分けている。そのギリシア人において、「身体が変わる」という物語（これは中間的な状態と言えるであろうか）を非常にたくさん見ることができるのである。オウィディウスの「変身物語」は有名だが、もちろんこれらギリシアの変身物語がその原型となっている。ここにはまず、身体は変わっても精神（のアイデンティティー）は変わらないという考え方があるように思われる。それでも「肉体に引きずられる」という側面があって、たとえばアルテミスによって鹿に変えられた英雄アクタイオンは、鹿らしい怯えた心「も」持ってしまうのである。しかしかつて自分が英雄であったときの雄々しい心も持っている。だから、逃げたい、けれども逃げられないのである。敵が恐いという気持ちは英雄にはない、が、鹿としては「恐い」という気持ちが出てくる。そのような肉体と精神の微妙な絡み合いといったものを変身物語は描いている。これらは物語ではあるが、その奥には、先ほど話題になったように肉体と精神がどのように一人の人間の中にあるのか、それは分離できるのかできないのか、という問題があるように思う。このようなギリシア・ローマの伝統について、当然アウグスティヌスも知っているはずであって、それに対する彼なりの答えが『告白録』の中にも隠されているのでは、と感じた。

加藤　信朗

このような問題に関しては、これからますます（特に日本の皆様方に）研究を進めていっていただきたいと思う。

水落　建治

思い出したのは『告白録』四巻の「友人の死」の後の場面についてである。アウグスティヌスは友人の死に耐えられずに故郷を去ってカルタゴへ行く。そこで「かつての私がいなくなってしまって、新しい快楽で私を繕う」のだが、「ときはむなしくやすんでいるのではなく、……心のうちに不思議な業をなす」と言われている。すなわちここでは、むしろ心の側の変化について語られている、ということを想い出した。

加藤　信朗

先ほど話題になったspeciesについて。創られたもののすがたspeciesが、何らか造ったものとの関わりを指し示している、だからそのすがた（それらは「私たちはあなたの神ではない」と叫ぶ）を見るとき、それらによって向け変えられる私が「お前は何なのか」と問われてくるのであろう。ここで「Deus meus 私の神」「Deus tuus あなたの神」は、決して「神一般」ではない。「あなた方は私の神なのか」「いや、あなたの神が私たちを造ったのだ」という構造である。いわゆる抽象的な「神というもの」が世界を創ったというのではない。「あなたの神が私たちを造ったのだ」と向こうの方から言ってくるから、それがどうしても「私」に返ってくるのである。この点は非常に微妙だと思われる。通常の「神様は創造主ですよ」という宣教の神学では語り尽くせないのではないか。

それから今日は話題にしなかったが、「Deus meus」の他に、たとえば後の『ヨハネ福音書講解』では「Pater meus 私の父」という言葉が使われること、そしてそれについて「qui genuit me 私を生んだ者」と言われるが、これはまったくイエスが言うのと同じ言葉であって、それをアウグスティヌス自身が使っているのは驚くべきことである。「Pater meus qui genuit me」とは、イエスを身に纏ってしまっている者としての言葉である。ここに、『告白録』の「あなたの神が私たちを創ったのだ」という叫び（声にならない声）が反響しているように感じられる。

上村　直樹

加藤信朗先生が、イマージュの束として『告白録』を見るときに脳裏に浮かび上がるものとして、様々な人の思い出を語っていらっしゃるが、それはとても印象的であった。当然ながらそれはアウグスティヌスにとっては身近な人々との交わりである。これは久米先生が仰った「中間の媒体」としての身近な人々との記憶の交わりとも繋がってくるが、そうすると、『告白録』自体が、何らかの中間的な媒体として機能するということが、同時にこの書物の独自性や著作の動機をも指し示してくるのではないか、と思われる。

加藤　信朗

私も、まったく同じことを感じている。

さきほども話題になったが、『告白録』の自伝的叙述が

なぜ第九巻で終わるのか、ということについても考えさせられる。第九巻の終わりに、アウグスティヌスは思い切り涙を流して泣いた、とある。そして祈りをもってこの巻を閉じるのである。ここからまさに、新しい（司教になるための）命が始まっている、と言うことができるのではないか。そういう意味では、『告白録』の頂点をオスティアに置くということに対して私には異論はない。しかし次に「veritatem facere 真理を行う」という方向に歩き出す、それが九巻の終わりの祈りの中に始まっていると思われるのである。そこには具体的には何も書かれていないのだが、書かれていないことこそが大事だということもある。

カッシキアクムの後、アウグスティヌスは「故郷アフリカへ帰ることにいたしました」と、たった一言だけ書いているが、この一言は、実に重い。もしもアンブロシウスが、アウグスティヌスのことを重要な人であると認識していたなら、このときに引き止めたに違いない。そしてアンブロシウスが引き止めたとしたら、アウグスティヌスとてそう簡単に断ることはできなかったであろう。アンブロシウスにとっては、アウグスティヌスが回心したということは「たいしたことではなかった」のだと、私は思っている。

さらに、カッシキアクム著作において中心的な人物であったリケンティウスが、その後元老院議員にまでなっているということを知って、私は驚いたことがある。つまり彼はローマ（アンブロシウスも含めて）の貴族社会において重要視された人物であったからそのような道を歩むことができたのである。それに対してアウグスティヌスは、私の為すべきことはここにはなく、「故郷に帰ることにした」と述べる、このたった一言は、やはりとても重いものであろう。アウグスティヌスはアンブロシウスに関して、その説教をよく勉強したと書いているが、アンブロシウスに対して「主の恵みの光」が輝いていた、とは言っていない、案外彼は正直なのではないか。アウグスティヌスがアンブロシウスの部屋を訪ねたとき、彼は書物から顔を上げなかったのでそのまま帰ってきた、というくだりがあるが、もしアウグスティヌスが権門の人であったら決してそんなことはなかったのではないか。きっとアンブロシウスは歓待したにちがいない（かれは外交家であるから）、そういうことも想像される。

上村　直樹

ご著書の「補論一」に、「二つの意志の葛藤」や「肉の掟と霊の掟の葛藤」が「性的誘惑」に限定されたものではないとあるのは、私もそのとおりだと思う。そのうえで、神を求める人々の交わりとしての友人たちとの共同体といったものを背景として、「continentia つつしみ」の手に包まれる「人々の群れ」に向かって『告白録』は書かれているのではないか、と思われる。

加藤　信朗

このへんは異論の多い箇所ではある。簡単に「こうだ」と言うことはできないが、continentia（女性形）とは何であろうか、と考えたとき、これはフランス語では直接に「celibacy 独身生活」のことを指す。これがいつ頃からの伝統であるかはっきりしないが、研究者たちがアウグスティヌスの葛藤を「性的誘惑」および「独身生活」と強く結びつけて考えるひとつの原因になっているのではないだろうか、とも思われる。

柴田　有

議論が白熱沸騰してきたところでまことに申し訳ないが、時間が尽きたのでここで打ち切りたい。

ご参加の皆様方に心から感謝申し上げる。

第一二二回教父研究会
（二〇〇七年一〇月二七日　於聖心女子大学）

司　会　柴田　有（明治学院大学）
発　言　加藤　信朗（首都大学東京名誉教授）
　　　　加藤　武（立教大学名誉教授）
　　　　久米　博（元立正大学教授）
　　　　田内　千里（上智大学）
　　　　佐藤真基子（慶応大学）
　　　　水落　健治（明治学院大学）
　　　　安村　典子（金沢大学）
　　　　上村　直樹（国際基督教大学）
記録作成　又野　聡子